

13th International Phycological Congressに参加して

桑田 向陽

2025年6月8日～13日に、フィリピン・ボホール州パングラオ島で第13回国際藻類学会議（13th International Phycological Congress）が開催されました。本会議は4年ごとに開かれる国際学会で、前はコロナ禍のためオンライン開催となったため、今回は2017年以来の対面開催となりました。会場はビーチサイドのリゾートホテルで、初日のWelcome Receptionや3日目のStudent Night（若手交流会）は砂浜で行われました。小雨が降る時間帯もありましたが概ね天候に恵まれ、夜風に吹かれながら心地よいディナーを楽しむことができました。Student Nightで出会った現地学生とは今でも交流が続いており、国際学会で同世代とつながり、刺激を受け合えることが毎回大きな魅力だと感じます。



Robert A. Andersen 博士（手前）との質疑の様子



授賞式後の福井県立大学と東京大学からの参加者（左から中地智里さん、菅原一輝さん、山田和正先生、佐藤晋也先生、Eldrin D.L.R. Arguellesさん、桑田向陽、岩滝光儀先生）

今大会では、4題のプレナリートーク、14分野に分かれたミニシンポジウム、パラレルセッション、ポスターセッションが行われました。私は口頭発表1題、ポスター発表2題を行いました。口頭発表では、透過電顕（TEM）を用いた海産有殻渦鞭毛藻アンフィドマ科の細胞内微細構造を発表しました。質疑応答では、ペラゴ藻の研究などで知られるフライデーハーバー研究所のRobert A. Andersen博士からTEM写真を高く評価していただき、大変光栄でした。TEMによる観察研究は現在では少なくなっているため、博士の関心を引いたのだと思います。その後もお話する機会があり、藻類分類学の大家から直接お言葉をいただけたことは貴重な経験でした。ポスター発表の1題では、函館湾から単離した*Gymnodinium* 未記載種の形態と系統について報告しました。本種は、研究室のメンバーが研究航海から下船した際に港で採取した海水試料から単離したものです。未記載種の研究発表では「種名は決まったのか」とよく尋ねられますが、今回もその話題になりました。私はこの発表によりGeorge F. Papenfuss Award（最優秀ポスター賞）を受賞することができました。本賞は故George F. Papenfuss教授を記念して設けられたもので、カテゴリーごとに最も優秀なポスター発表を表彰するものです。国内外を通じて初めての受賞であり、歴史のある国際学会で基礎的な系統分類学研究が評価されたことを大変嬉しく思います。微細藻類の分野では、福井県立大学の佐藤晋也先生の研究室を卒業されたフィリピン大学ロスバニョス校のEldrin D.L.R. Arguellesさんが口頭発表賞を受賞されました、おめでとうございます。

3日目にはエクスカーションとして隣のボホール島を訪れ、チョコレートヒルズやターシャ保護施設を見学しました。チョコレートヒルズは石灰岩でできた小高い丘で、乾季には草が枯れてチョコレート色になりますが、訪問時は雨季に差し掛かっており一面が抹茶色でした。また、ランチクルーズでは熱帯雨林の大自然に囲まれながら食事を楽しみ、格別の体験となりました。

本大会を通じて、微細藻のみならず大型藻に関する最新の研究動向も拝見しました。普段は会場やセッションの違いから両分野の交流も限られていますが、共通する手法や考え方も多いことを実感しました。他分野の研究からも学びつつ、自身の研究の幅をさらに広げていきたいと思える、大変有意義な学会参加となりました。

（東京大学大学院農学生命科学研究科）